

竹下諄さんは、初めて書き上げた小説で「香川菊池寛文学賞」の奨励賞を受賞しました。受賞作の『落書き』は、大学受験を控えた男子高校生が大学や学部を選択を通して将来に向き合い、不安や揺らぎを感じながら成長する姿を描いた青春小説です。

大学生になり電車通学を始めた竹下さん。車中で小説を読み始めてその魅力に引き込まれ、現在では月に10冊以上読む時もあるほどです。好きなのは、登場人物の内面に深く踏み込み、丁寧に描いた物語。作者の意図に共感するものもあれば、掴みきれないものもあり、「自分が書き手を経験したら、小説がもっと面白くなりそうだ」と思っていたところ、昨年の夏休み前に、法学部の連絡掲示板で「香川菊池寛賞」の募集告知を見つけて、応募を決めました。コツコツと1か月で書き上げ、さらに1か月かけて全体を細かく書き直し。師匠も、アドバイスをもらう人もない中、独力で原稿用紙75枚の小説を書き上げました。

受賞の知らせがあったのは絞め切りから4か月ほど後の今年1月。書き切ったことに満足し、応募した事も忘れかけていた頃です。

「突然、奨励賞受賞を知らせる電話があり、同時に受賞の記者会見に出てくださいと言われました。困ったことになったと思いつつも、咄嗟に『スーツが要る』と思い、『クリーニング済みのスーツはあるかな』と母に聞いたら、『誰かの結婚式でもあるん?』と暢気に聞われ、その時初めて小説を書いていることを人に話しました」と竹下さん。

家族に受賞を告げるシーンは、ユーモアの

ある視点と淡々としながらも引き込まれる言葉で語られ、会話の中にも小説を書く人らしさがあります。

ゼミでは「人の権利について、日常生活で当たり前になりがちなことに改めて疑問を持ち、考えを深めることができる」からと、憲法を専攻。卒業後は就職し、趣味で小説を書き続けるつもりです。一作書いたからこそ、テーマや構成、文体・人称など、小説の面白味を支える要素の多彩さに気づき、新しい小説で気づきを実践してみたいと思うようになりました。

『落書き』は菊池寛記念館が発行する文芸誌『もず』に掲載されます。現役香川大生が書いた受験の日々のストーリー。ぜひ読んでみてください。

学生活動

Student Activity

法学部3年生 竹下諄さん

受験の日々を描いた初の小説が
香川菊池寛文学賞奨励賞に。

